

ジュディス・バトラーの身体論の再考

岡崎 佑香 (一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程/学振 DC)

本報告は、従来の研究においてジュディス・バトラーの身体論がどのような批判的受容をされてきたかを概観したうえでバトラーの理論的境界を指摘する、清水晶子の研究を批判的に検討することで、バトラーの身体論の核心を示すことを目的とする。

Gender Trouble においてバトラーが提示した身体論 (ジェンダー・パフォーマンス・ヴィティ論およびジェンダー・メランコリー論) は、それが「身体の物質性」を否定あるいは軽視しているとして繰り返し批判されてきた。清水晶子は、*Lying Bodies* (2008) において、バトラーの理論に対する従来の批判を次の二つに区別して整理している。清水によれば、一方の見解が批判するのは、バトラーが「セックスを「想像上の構築」と言及することによって、物質性の過酷な現実を過小評価している」ためであり、他方の見解においてはバトラーが「まさに還元不可能なものを言説に還元している」点において批判される。

清水がこれら二つの批判を区別するのは、後者の批判がバトラーの論点を捉え損なっているからである。すなわち、「[バトラーの] 論点は、あらゆるものが言説として構築され、言語に還元され得るか否か、ではない。そうではなくむしろ論点は、物語化され得ない領域がいかにして言説を通じてそのようなものとして境界画定されるかである」(11)。つまり、清水にとってバトラーの身体論は、いかにして言説の外部が言説的に構築されるかを論じるものであり、それゆえに言説還元主義という批判は当たらないのである。

前者の批判に依拠したうえで、清水はバトラーの理論的境界を次のように指摘する。「バトラーはいかにして物質的身体が言説の彼方にある「自然な [natural]」物質性として想像上「文字通りのものにされる [literalized]」のを説明してはいるものの、ある主体がときにこの想像上の構築物を、不自然なものとして、自分ではないものとして経験することがありうるのはどうしてかを十分に明らかにしていない」(11)。つまり、清水の見出すバトラーの限界は、「主体が十分に自然化された [naturalized] ものとして、あるいは十分に「文字通りのものにされた」ものとして経験することのないような身体を考察するのに失敗している」(15) 点にある。

清水によるこうしたバトラー批判は、身体をめぐる「自然化」あるいは「文字通り化」のプロセスに先立って存在する「自然な」あるいは「文字通りの」身体を想定している。あるいはそれは、ある種の「身体」を「自然化」あるいは「文字通り化」のプロセスから取りこぼされる/予め排除されるものとして言及している。本報告ではまず、清水のこうした理解こそバトラーが批判する身体の前 - 言説的な解釈への逆行に他ならないことを指摘し、清水の誤解を剔抉する。そのうえで、清水や、彼女の依拠する障害学やトランスセクシュアル理論が「身体の物質性」を否認しているものとみなした *Gender Trouble* や *Bodies that Matter* 等におけるバトラーの身体論の意義を明らかにしたい。